

堀越ゆき訳『ある奴隷少女に起こった出来事』の翻訳論的考察

山田 健太郎

A Study of Yuki Horikoshi's Translation of *Incidents in the Life of a Slave Girl*

Kentaro YAMADA

抄録 本研究では、ハリエット・アン・ジェイコブズ著『ある奴隷少女に起こった出来事』の堀越ゆき訳における原作からの削除部分について、スコボス理論の観点から考察を行った。翻訳の方向性として「読みやすさ」と「少女の物語」をスコボスとして分析評価した結果、「読みやすさ」にはある程度の成果が認められるが、「少女の物語」については原作の内容とのずれにより限定的な達成となっていると判断される。奴隷体験記の翻訳という観点から見れば、黒人表象として不足する点が見られた。

キーワード : 翻訳, スコボス, 奴隷制度, 黒人表象

1. はじめに

本論文では、堀越ゆきによる翻訳『ある奴隷少女に起こった出来事』(以下、堀越訳)における、翻訳と表象について考察をする。¹⁾ この翻訳の特徴の一つとして、原著のかなりの部分を削除し、さらにいくつかの改編も行って一つの作品としていることがあげられる。そこにはどのようなねらいがあるのか、その結果どのような黒人表象となっているのか、翻訳論的観点から考察をする。

『ある奴隷少女に起こった出来事』は、アメリカの奴隷体験記の代表的な作品の一つとして今日評価が定着しつつあるといえよう。たとえば、*The Cambridge Companion to the African American Slave Narrative* に収められた 14 本の論文中 4 本で 2 ページ近くの言及があり、さらにジェイコブズの自伝を論じた論文が 1 本あり、「ダグラスとジェイコブズを越えて」というタイトルのエッセイでは奴隷体験記の 2 大作家の一人として論じられている。²⁾

しかし、1861 年に出版されたこの作品は、作品の作者について信憑性を疑う意見もあり、注目されることもなく、長い間研究対象にもあまりならなかった。しかしながら 1987 年にジーン・ファガン・イェレンが著者や作中人物を特定した研究成果をもとに丁寧な解説序文を書いて、ハーバード版を出版すると、³⁾ 次第に研究論文も書かれるようになった。2001 年にこの作品の翻訳を出版した小林憲二の序文となる文章によれば 1999 年から 2000 ころのアメリカの大学では、アメリカ文学、アフリカン・アメリカン研究、フェミニズム研究のコースのほとんどで、ジェイコブズの自伝が授業で取り上げられ、あるいは必読書とされていたという。⁴⁾

一方、日本においては、アメリカ文学研究者以外でこの作品を知っている人は、最近までさほど多くなかったと思わ

れる。2001 年に出版された小林憲二訳『ハリエット・ジェイコブズ自伝』はしばらく唯一の翻訳であったが、残念ながら絶版となっている。ここに変化をもたらしたのが、2013 年に大和書房から、⁵⁾ そして 2017 年に新潮社により文庫化され出版された堀越訳である。新潮文庫は版を重ねているようで、新潮社のホームページには、この作品のページがあり、2017 年に海外メディアが日本での反響について取り上げた記事のリンクが張られている。⁶⁾ さらに、あらいまりこによる漫画版もインターネットの漫画サイトである『WEB コミックアクション』に連載されており、⁷⁾ そのうち 5 話までが双葉社から出版されている。⁸⁾ このような現象の中で、堀越訳の特徴はどのようなものとなっているのか、文学作品としてどのような位置づけとなりえるのか、考察をしてみたい。

文学作品の翻訳研究の場合、その多くは北條文緒のように、語句や表現の置き換え、あるいは段落の変更など、文体上の詳細な相違点を比較し、そこから起点テキストの文化と目標テキストの文化の違いについて考察したり、あるいは両文化間のコミュニケーションとしての翻訳の方略について論じることが多いが、⁹⁾ 本論考では、堀越訳における削除部分を主に検討し、それにより物語全般にどのような変化が起こっていると考えられるか、結果としてこの作品はどのように評価をすることが可能か、翻訳者の目的と思われるものとも照らし合わせながら考察したい。もちろん、細かな言葉の選択の積み重ねによる文体によっても、作品の意味は大きく異なるが、本研究では、翻訳者の主体性が顕著に表れている削除という行為をとらえ、その変更のねらいとしてどのようなものが想定されているのか、あるいはそれによりこの作品はどのようなものとして再創造されたのかについて考察したい。

2. 原典と翻訳の比較

2.1 使用した翻訳と原典の版

分析に使用するテキストを簡単に整理しておこう。堀越訳は、初版が大和書房から2013年に出版され、その後2017年に新潮文庫の1冊として出版されている。文庫版末尾に大和書房より出版されたものに加筆・修正を行ったという記述があるが、両版には大きな違いはなく、解説や著者あとがきも基本的にはそのままである。本研究では、文庫版を対象に分析を行い、適宜大和書房版を参照することにする。対比する原典のテキストとしてはノートン批評版(Norton Critical Edition)を使用した。¹⁰⁾ なおこの自伝では、描かれた人々を守るために登場人物に偽名が使われており、ハリエット・ジェイコブズも作中ではリンダとなっている。以下、作品内容について論じる場合には作中の人物名を使用することにする。

2.2 翻訳における変更(削除)の概要

堀越訳の変更点の概要をまずまとめておこう。原典の物語本文は、分析に使用したノートン批評版で約157ページである。本研究では、原典の文章の1行以上の明らかな削除部分のみを拾い上げた。翻訳に際し原文から削除されている部分は、おおよその行単位でカウントした。合計した削除の総量は約1976行である。ノートン批評版は1ページ45行で組まれているので、おおよそ44ページ分、全体の約4分の1強の内容が翻訳に際して本文から削除されている。削除は全部で89箇所あり、短いものは1行程度のものもある。一方、もっとも長い削除部分は原典の10ページ以上にわたる。次に長い削除部分は7ページ弱が1箇所、その次が約2ページ分の1箇所、そして1ページ半分が1箇所、さらに1ページ前後の削除が5箇所ある。

削除に伴い、全体の構成にも変更がある。原典では物語部分が41章であったのが、堀越訳では37章になっている。4章分の削減である。さらに、構成上の変更としては、原典にはなかった「少女時代」「逃亡」「自由を求めて」という3部構成のタイトルが付け加えられている。これらは、3部それぞれの始まりに挿入された地図や間取り図とともに、翻訳者の解説的補助情報として作品につけ加えられているといえよう。また、話のバランスを整えるためと思われる1段落分の内容の移動がある。

2.3 削除部分に描かれた主な内容

ここでは削除されていた原典の内容について、整理し検討する。削除部分の中でもっとも長かったものは、原典で第12章から13章にわたる部分である。ノートン批評版で10ページ以上が削除されている。まず第12章では、1831年に起こったナット・ターナーの反乱によって南部白人社会に広がった黒人奴隷に対する恐れと、それゆえに過激になっ

た白人自警団の取り締まり行為がある。年に一度行われるこの行事で、奴隷を所有しない身分の低い白人が自警団として雇われて、奴隷の住居を一軒ずつくまなく調べ、銃弾はもちろん手紙があるだけで疑いをかけ、さらには略奪を働く彼らの様子が描かれる。リンダの祖母の家にも捜索隊がやってきて、文章の書かれた紙が家の中に見つかったことで疑いをかけられたが、知り合いの白人に守ってもらうことで、難をのがれたエピソードが紹介されている。

続いて第13章では、南部キリスト教会と奴隷制度について書かれている。ナット・ターナーの反乱を受けて、奴隷たちをキリスト教会の影響下におくことで、反抗の芽を摘もうという考えが南部に広がり、リンダのいる地域でも監督教会の牧師が奴隷に向けて毎週日曜日に説教をするようになったが、奴隷を怠惰で欲望だらけの人間と決めつけ、主人に従うことを神への道と説くだけの、薄っぺらな内容の説教の繰り返しであったことが語られる。また、その次にやってきた牧師は、理解があり親愛の情をもたれる人物であったが、そのために奴隷所有者たちと対立したこと、さらに、その牧師の夫人は死の床で使用していた奴隷たちを自由にすることが語られる。それから聖書を読めるようにとリンダに文字を教えるように頼んだ奴隷の話をあげ、53歳になってバプテスト教会に入信し、神の道に近づくために、見つかれば鞭打ちの形となる危険をおかしてでも熱心に文字を覚えたことが語られ、多くのそうした信仰心の篤い奴隷に手を差しのべることを教会関係の人々に訴えている。続いてそれとは対照的に、入信しながらも退廃的な態度をとる卑劣なプリント医師の振る舞いを描き、真の信仰はむしろ奴隷の中にあることを示唆している。また、ここでは奴隷たちがメソジスト集会をしたり、独自に黒人霊歌を歌っていたことも紹介されている。

その次に長い削除部分は第4章にあり、約7ページ弱にわたる。ここではリンダの叔父にあたるベンジャミンに関する内容が省かれている。ベンジャミンはリンダの祖母の一番年下の息子であり、リンダにとっては叔父にあたるが、年齢も近いため、兄のように慕っていた人物である。削除箇所では、ベンジャミンが奴隷主の虐待に耐え切れず逃亡したものの、途中で捕らえられ、連れ戻されると6か月以上牢屋に入れられたが、再び逃亡し、北部で自由を得たことが述べられる。そのエピソードの中で、2度目の逃亡途中でベンジャミンを北部の町で偶然見かけたときに見逃してくれた、親切な近所の紳士について語られる。そしてニューヨークを仕える夫人の用件で訪れていたもう一人のリンダの叔父であるフィリップが、自由に向けて進むベンジャミンに再会したところで第4章が終わる。

その次に大きいのは第8章全体の削除である。おおよそ2ページの章には、南部の奴隷主が奴隷たちに北部に逃亡する気持ちをもたせないために、北部に出かけた際に偶然会った元逃亡奴隷が悲惨な生活をしていたという巧妙な嘘

をつくことや、南部に来る多くの北部人が南部人に気に入られようとして奴隷制度のことを批判しないこと、一方で、そんな状況でも奴隷たちは北部に、そして自由への希望を持ち続けるということが書かれている。

上記よりやや短い1ページ半程度の量の削除箇所が第40章の中ほどにある。章全体は逃亡奴隷法が発効した直後の北部に住む元奴隷の間に広がった動揺について書いているのだが、その中からルークという奴隷のエピソードが削除されている。その内容を要約すると、若くして手足が不自由になった奴隷主を世話することになったルークは、奴隷主が不自由さから募らせる鬱憤のはけ口として毎日のように鞭で打たれ続けていた。しかし、逃亡奴隷法後のある日リンダはニューヨークでルークに会い、彼がカナダに向かう途中であることを知る。そしてそこでの会話からルークが、知恵を絞って合法的に臨終間際の主人から旅行資金を手に入れたことを聞いたことを語る。そして窮状の中に人を置くことは人をずる賢くもするものだとしてエピソードをまとめている。

次に長めの削除部分としては、ノートン批評版でおおよそ1ページ、行数にして約36行から46行のものが5箇所ある。それらの内容を簡単に要約すると、1つめは、第9章にある近隣の残酷な奴隷主の例をあげる部分で、コナント氏が、口答えした奴隷を罰として極寒の中外に縛りつけて半死状態にしたことや、盗みをはたらいた奴隷を棒で殴って死にかけるくらい失血させたことが語られ、それからウェイド夫人が朝から晩まで、男勝りの力で多くの奴隷を鞭で打って、奴隷からの恨みをかったことが述べられる。2つめは、第14章のリンダとサンズ氏とのあいだにできた子供たちに関するところで、北に逃亡した叔父にちなんで自分の息子にベンジャミンと名付けたことと、フリント氏が不在の時をねらって教会で子供たちに洗礼を受けさせたが、罪深い関係で子供をつくってしまったことに悔悟の念で苦しんだことが語られる。3つめは、第26章の弟ウィリアムに関する内容で、弟から手紙が届いて、その中でサンド氏の待遇に不満はなかったが自由への道に進む決意をしたことが書かれていたこと、さらに後日その時のいきさつをサンズ氏がフィリップ叔父に話したことが述べられる。

残りの2つは、リンダが北に逃れてからのエピソードである。その1つは第35章の後半部で、南部からの追手が来ると娘のエレンから聞いたリンダは、ブルース夫人とロッカウェイに逃れることにするが、白人である夫人に同行しながら、絶えず人種差別的な周囲の視線や態度にさらされたことが述べられる。もう一つは次の第36章の後半である。いったんニューヨークに戻ったところで、再びエレンから、エレンを預かっているホブス夫人の兄であるソーン氏の裏切りにより、追手が来つつあることを聞き、二人でボストンに逃れることになったエピソードで、その移動手段として使った蒸気船や列車で客室の使用について差別的な決まり

があったが、親切な船長と車掌にめぐまれて、どうにか寒さに凍えたり、みじめな思いをせずにすんだことが語られる。

これらよりもやや短い30行前後の削除が4箇所ある。ごく簡単に内容を記すと、1つめは第11章でリンダが最初の子を出産した後にフリント氏がウィリアムを助手にし、医療だけでなくリンダにメッセージを渡す役をさせたエピソードである。2つめは、第16章で息子の方のフリント氏のプランテーションで働くことになったリンダが、夜に人目を忍んで祖母の家を訪れて息子に会ったエピソードである。3つめは、第28章でリンダが屋根裏に潜んでいる最中にナンシー叔母が亡くなった時のエピソードで、そして4つめは、第41章で、フリント氏の死後、遺産を相続したダッジ夫妻が、リンダを奴隷の身分に連れ戻しにニューヨークに来た際のことで、リンダが知り合いの黒人に頼んでダッジ氏の様子をうかがいにホテルに見に行ってもらったエピソードである。

2.2で述べたように、堀越訳の削除部分は少なくとも89箇所ある。ここまでみてきた削除箇所以外に、さらに短い20行以下のものが数多くある。そして、それらの変更も作品世界の変化に一定程度の影響を与えている。しかしながら、本研究は語彙使用分析のような数量分析を行うのではないことと、短い削除部分の多くは大きな削除によって生じた必要から行われている可能性が高いため、それらについてはここに記することなく論考を進めることにする。

3. 考察

3.1 翻訳と目的

以上の翻訳上の変更について考察をするにあたり、本論考での翻訳論的観点を中心にまとめておこう。山本史郎は、一般読者に向けた翻訳案内の本で、原典に書かれているものを文法的に正しく解釈して、辞書にあることばで置き換えるというのが翻訳だという「常識」を壊すことを念頭に置いたと述べている。¹¹⁾ 翻訳がことばの選び方程度のことと思われていることが多いことが、長年の東京大学での教育経験をふまえた実感として伝わる文章である。

翻訳についての一般的な理解としてあると思われる、原典と翻訳は「同じもの」というとらえかたは、翻訳論では「等価」という概念で表現される。まったく同じではないが、「ほぼ同等」という考え方である。この「等価」についてもさまざまな議論が翻訳論ではあるが、翻訳行為の実践は多様なニーズの中で行われており、こうした狭い枠組みに収まるものではないとして、パラダイムの拡大を提唱したのが、ライスとフェアメアのスコボス理論である。翻訳行為には目的が想定されており、目的によっては「等価」が必ずしも求められない場合があるとする考え方である。この理論では、翻訳行為における優先的に存在する目的をスコボスと呼んでいる。たとえば文学作品を少年・少女向けのシリーズの一つとして翻訳する際には、原典と等価であるかは、その

シリーズに適切なものという目的に沿う範囲内で実現されるということになる。¹²⁾

本研究では、このスコポス理論にそって翻訳の分析・考察をする。

3.2 翻訳者のねらい

2.2, 2.3 でみたように、堀越訳では、表現上の様々な工夫がなされている一方で、その大きな特徴として大幅な削除が行われている。ここに翻訳者の主体性が明確に表れているわけであるが、その目標設定、目的はどのようなところにあったのであろうか。

訳者あとがきによると、出版に至ったきっかけは、2011年に仕事の移動中に読書の本を検索した際に、世界古典名作ベストセラーの中にこの作品を見つけ、自分がまったく知らない作品であることから興味をもち読んでみたところ、非常に感動したことから始まったということである。あとがきの「現代少女のための新しい古典文学」としたセクションでは、ジェイコブズ自伝が古典ベストセラーで唯一の実話である点を強調し、現実社会の厳しさを少女に教えてくれる力が、この120年以上忘れ去られていながら再発見された古典文学にあると考えたことが述べられている。¹³⁾

さらに「この本の読み方」としたセクションでは、最初に「この本にただしい読み方はない」とことわった後、作品をアメリカにおける奴隷制度の歴史やその中で女性について学ぶ文献として読まれることを想定して翻訳をしたのではなく、「自分だけの心に響く、表現できないなにか」をみつけるために読んでもらいたいと述べている。そして、そのために「読みやすさを重視し、当時の奴隷制に関する著者の一部の政治的見解や描写、ジェイコブズ自身の人生から逸脱する登場人物に関する記載、また当時の女性著者特有の現代では感傷的に響く重複は削除」したと述べている。¹⁴⁾ 堀越が翻訳の際に行った削除の方針については、ここで唯一の説明が行われている。

出版元の新潮社の作品紹介も、この翻訳における目的を読み取る上で参考になる。新潮社ホームページにある堀越訳の紹介は、「好色な医師フリントの奴隷となった美少女、リンダ。卑劣な虐待に苦しむ彼女は決意した。自由を掴むため、他の白人男性の子を身籠ることを——」と作品内容を紹介している。このホームページには「作家自身が語る」という翻訳者による紹介音声があり、「この本は約200年前に奴隷として生まれた女の子が書いた回想録、実話です」と説明を始めている。¹⁵⁾

「少女」という言葉がキーワードとして何度も繰り返されていることから、翻訳者および出版社がこの作品を「少女」の物語として世に送り出そうとしていることがわかる。このことは2018年6月の『Foresight』での翻訳者インタビュー記事でも確認することができる。この記事においてもほぼ一貫して著者を「少女」と言及している。¹⁶⁾ 新潮社

ホームページの「好色な医師フリントの奴隷となった美少女」という表現からは、さらにやや煽情的なストーリーとして注目を集めようとしている出版社の意図もうかがわれる。

以上のことから、この翻訳におけるスコポスとして「読みやすさ」「少女の物語」をその主要なものとして想定できよう。

3.3 翻訳の評価

それでは、そのスコポスにそってこの翻訳を検討した場合、どのような評価となるであろうか、あるいはまたそのスコポスの意義も含めたより大きなコンテキストの中で、この翻訳はどのように評価できるであろうか、以下考察をすすみたい。

3.3.1 スコポス（読みやすい物語、少女の物語）

本研究では、堀越訳における削除部分を中心に考察を進めているので、訳文の文体論的詳細な分析は行わずに、読者が感じた読みやすさという点で検討をしていくことにする。ここでは、アマゾンの購入者によるレビュー評価を一つの指標として参照しておこう。2021年10月31日時点のアマゾンでの堀越訳についての書評は、アマゾンによるカテゴリで、肯定的なレビューが63件、否定的なレビューが12件、計75件である。

この中で「物語に引き込まれた」も含む読みやすさの印象が読み取れるレビューは、24件ある。文体についての批判的な意見が4件、削除についての批判が3件あるが、そのために物語の内容がわからなくなっているということではないので、「読みやすさ」という目的としては、一定レベルの達成をしていると評価することができよう。

一方、この作品を基本的に「少女」の物語というとならえかたをしていることを示唆するレビューは13件で、読みやすさについてのレビューに比べると少ない。この中の1つは「少女、母親の姿」という表現である。これはやはり訳者や出版社がこの作品に与えようとしているイメージが、物語そのものと少しずれているためではないかと考える。たしかに15歳の頃にはじまったフリント氏の性的虐待が、リンダの苦難だらけの悲劇的な人生の始まりであり、それは少なくとも自由になる39歳の頃まで形を変えながら執拗に続いたわけである。しかし、この作品に描かれる期間に限っても、その人生の半分近くは2児の母であったわけであり、子供を守る母としての戦いという側面が大きい。フリント氏の直接的な性的虐待にさらされた数年だけで終わる物語としない限り、「少女」の物語とするのは、たとえ原作のタイトルに「少女」があるにせよ、難しいことに思われる。この作品は「ある少女に」というよりも、「ある奴隷少女の人生に起こった出来事」、あるいは「ある奴隷の少女時代から（母となって子を社会に送り出すまでに）起こった出来事」ということなのである。

3.3.2 奴隷体験記として、黒人表象

上で述べたように、訳者あとがきで堀越は、削除の方針として「当時の奴隷制に関する著者の一部の政治的見解や描写、ジェイコブズ自身の人生から逸脱する登場人物に関する記載、また当時の女性著者特有の現代では感傷的に響く重複」を省いたと説明している。この点について、2.3で指摘した削除箇所をここで検討をしておこう。

まず、もっとも大きな削除部分である第12章から13章にかけての主な内容は、ナット・ターナーの反乱後の南部社会の動揺と白人の物騒な動きに振り回されるリンダの住む黒人コミュニティの様子である。もちろん、彼女も含めた家族の様子やプリント医師の様子も描かれるが、この箇所全体としては、リンダの物語というよりも当時の奴隷制度社会の描写という趣旨が強い部分といえよう。ほかの削除部分の多くについても、同様に奴隷制度社会の苛酷な実態を紹介するための様々なエピソードといえる。

しかしながら、その次に長い7ページにわたる第4章の削除箇所は、リンダにとって身近な叔父ベンジャミンのエピソードである。彼の奴隷制度への死に物狂いの抵抗から逃亡までを描くこの部分には、同じ奴隷制で苦しむリンダとのやりとりの場面もある。奴隷制度の説明というよりもリンダの人生の一部である。もちろん、リンダは当事者ではないが、彼女の自由を求める人生観の形成に影響をもたらした人物の物語であることを考えると、決して「人生から逸脱する」と片付けられない内容であると考えられる。身近な人物ということでは、弟ウィリアムや叔母ナンシーの死についても1ページ近い削除があり、これらもまたリンダの人生の一部の削除である。

またリンダの子供の教会での洗礼や、わが子に会うためリンダが人目を忍んで祖母の家を訪ねたエピソードも、プリント氏の支配からの逃亡劇の一部ではないが、リンダ自身の経験である。リンダ自身の経験ということでは、北部での逃亡生活の際に経験した北部社会でも制度化されている人種差別や、一方でリンダの境遇に同情し個人として手を差し伸べる人々などのエピソードもそれぞれ1ページ近い内容が削除されている。

こうしてみると、少女リンダが執拗に迫るプリント医師から逃亡し自由を手に入れるまで、というプロットに関係していないエピソードについてはすべて削除する、というような極端な単純化に向かうことは当初から想定されていないとしても、奴隷として生まれたリンダの経験する奴隷制度の不条理と当時のアメリカ社会で制度化された人種差別について、また奴隷制度や白人中心主義に抵抗する黒人について、原作が描いているものの中から削除されたものと残されたものについて、一貫した方針は見つけにくい。奴隷体験記の翻訳を奴隷制度に関する説明を削除しながら行うことの矛盾が露呈しているように思われる。

奴隷体験記について峯真依子は、そこに「人が自由を求め

て必死に闘うという時代を超えた普遍性がある」一方で、その出版までにいたるほとんどの場合において、反奴隷制協会等での講演の積み重ねがあり、多くの奴隷体験記において、そうした講演との一体感があり、その過程で、聴衆の反応や助言者の意見など、様々な要素が取り込まれていることが特徴として認められると述べている。¹⁷⁾ このことは、このジャンルに公共性の要素をもたらしているとも考えられる。つまり、個の物語であると同時に公共（奴隷、のちには黒人）の物語ということである。

イェリンによるジェイコブズの伝記でも述べられているように、ジェイコブズは、この自伝をもともとは書くつもりはなかった。¹⁸⁾ そもそも自伝で書いているように、北部に到着してすぐに支援の手を差し伸べてくれた牧師から、白人との不義の子をもうけたことを人前で話すことと人の信用を得にくくなるので注意をした方がいいという助言を受けて以来、¹⁹⁾ 罪の念に苛まれて、自分の過去は親しい人にすら語らずにいたということがある。それにもかかわらず、同じ奴隷制度に苦しむ人々に援助の手が差し伸べられることに貢献できればと考えて、勇気を振り絞って著作に向かったわけである。このことは、作品の語り口調に明確に読み取ることができるし、彼女の語る声は偽善的で圧政的な白人を批判的にみる眼差しに貫かれている。

そして語り口調だけではなく、自伝に組み込まれたエピソード群もまた奴隷の、そして黒人の姿を表象するべく自伝に組み込まれていると考えられる。悲惨な死を迎えた人々のエピソードにより同情を引こうとする一方で、見事逃亡に成功した叔父のベンジャミンのエピソードのようなものは、ある意味誇らしげに描かれているわけであり、またメソジスト集会や黒人霊歌などの黒人コミュニティの文化も、彼らがたくましく抵抗する姿として作品の中にある。スコボスとの関係でその多くは削除されたということではあるが、この作品の原作がもっていた特徴と意義を考えると、こうした部分の価値については、慎重な評価を必要とするように思われる。作品の黒人表象から、このような黒人奴隷の抵抗する力、たくましく生きる知恵の部分がかなり削除されていることは残念なことである。

4. おわりに

一般的に、作品を原典で読むのが難しい読者に広く届けることが翻訳の本質的な役割の一つであることは議論の余地のないことであろう。その意味において、堀越訳の「読みやすさ」は、その出版後の反響、さらにはその延長線上に進んでいるコミカライゼーションも含めて、大きな貢献をなしているといえよう。その現象の一部には「少女」というキーワードの前景化も多少貢献をしているかもしれない。しかし、その一方で、奴隷体験記の古典としての原作からは、その分遠いものになっていることは明かである。削除された部分の奴隷体験記としての価値をより正確に把握し、

小林憲二訳や原作への道を具体的に示し、奴隷体験記への入り口としての位置づけを明確にしておくことで、堀越訳の役割を明確にしておくことは、この作品の価値をさらに高めることにつながるのではないかと考える。

Books, 2004, pp. 118-19.
19) Jacobs : p.135 ; 堀越訳 : p.258-59

文 献

- 1) ハリエット・アン・ジェイコブズ：堀越ゆき訳 『ある奴隷少女に起こった出来事』 新潮社 2017.
- 2) Audrey Fisch ed. : *The Cambridge Companion to the African American Slave Narrative*, Cambridge University Press, 2007.
- 3) Harriet Jacobs : *Incidents in the Life of a Slave Girl, Written by Herself*, ed. Jean Fagan Yellin, Harvard University Press, 1987.
- 4) ハリエット・ジェイコブズ：小林憲二編訳 『ハリエット・ジェイコブズ自伝 女・奴隷制・アメリカ』 明石書店 2001
- 5) ハリエット・アン・ジェイコブズ：堀越ゆき訳 『ある奴隷少女に起こった出来事』 大和書房 2013
- 6) 新潮社：ある奴隷少女に起こった出来事
<https://www.shinchosha.co.jp/book/220111/>
- 7) あらいまりこ：ある奴隷少女に起こったできごと：WEBコミックアクション：双葉社
<http://webaction.jp/webcomic/arudoreisyoujo/>
- 8) あらいまりこ：『ある奴隷少女に起こったできごと』 1 双葉社 2020
- 9) 北條文子：『翻訳と異文化 原作との〈ずれ〉が語るもの』 みすず書房 2004
- 10) Harriet Jacobs : *Incidents in the Live of a Slave Girl: Authoritative Text, Contexts, Criticism, Norton Critical Edition*. Second ed. Francis Smith Foster & Richard Yarborough Ed. W. W. Norton & Company, Inc., 2019.
- 11) 山本史郎：『翻訳の授業 東京大学最終講義』 朝日新聞出版 2020 p.7
- 12) カタリーナ・ライス&ハンス・ヨーゼフ・フェアメーア：藤濤文子監訳 伊原紀子／田辺希久子訳 『スコポス理論とテキストタイプ別翻訳理論 一般翻訳理論の基礎』 晃洋書房 2019
- 13) 堀越訳：pp.323-329
- 14) 堀越訳：pp.329-330
- 15) 新潮社：書籍詳細：ある奴隷少女に起こった出来事
<https://www.shinchosha.co.jp/book/220111/>
- 16) 「200年前に生まれた「奴隷少女」の手記はなぜ現代でベストセラーになったのか『ある奴隷少女に起こった出来事』(新潮文庫) 記者インタビュー」：『Foresight』2018年6月26日 新潮社
<https://www.fsight.jp/articles/-/43889>
- 17) 峯真依子：『奴隷の文学誌 声と文字の相克を語る』 青弓社 2018 pp.24-27
- 18) Jean Fagan Yellin : *Harriet Jacobs: A Life*. Basic Civitas